

福島から大学を問う

10・21全国学生集会

講演：豊島耕一さん 「福島原発事故と
大学人の責任」
(佐賀大学理工学部教授)



佐賀大学理工学部物理科学科教授。福島第一原発事故を受けて、6～7月玄海原発再稼働を止める行動の先頭に立ち多くの市民とともに活動。「玄海原発プルサーマル裁判」原告。また、国立大学法人化に対して「独法化阻止全国ネットワーク」を立ち上げ、大学人として一貫して大学の変質に立ち向かってこられました。

原発から大学の腐った現実が明らかになり、大学のあり方が問われている今日、福島の地で「学生・大学人は今何をすべきか」、講師とともに考えたいと思います。

◆日時 10月21日(金) 昼

◆場所 福島大学キャンパスにて

主催：10・21福島大集会実行委員会

呼びかけ 豊島耕一(佐賀大学教授)／斎藤郁真(全学連委員長・法政大学文化連盟委員長)
／福島大生有志

連絡先 090-9374-8276 furukori@ezweb.ne.jp(古郡)

全ての学生は福島大・福島県立医大へ

10月21日昼休み、福島大学キャンパスに集合。福島大生とともに集会、申入れを行います。

同日、福島県立医科大学では学者の権威を使って福島県民に被曝を強要し、被曝データを集めている山下俊一副学長(長崎大学教授を退職し福島県立医大副学長に就任。右写真)に対する抗議行動も予定しています。

学生が行動に立ち、真剣に「大学はこれで良いのか」と問おう！全国から大結集を訴えます！

御用学者は大学にいらない！



「私は安全を皆さんに言っていない。安心を語っている。」
「放射線の影響は、実はニコニコ笑ってる人には来ません。クヨクヨしてる人に来ます。」

(講演会での山下発言)

10・21 福島大集会の呼びかけ

すべての学生に、福島大学で行う10・21「フクシマから大学を問う 全国学生集会」への参加を訴えます。3・11大震災と福島原発事故はこの国の腐敗を突き出し、多くの人が行動を始めています。その一方、「御用学者」問題など大学と研究者の問題点が誰の目にも明らかになりました。時代は、私たち学生・大学人にこそ行動を求めています。次の未来へ向かって私たちが何をなすべきかを福島現地から共に考えていこうではありませんか。

3・11を受け、多くの人が自らの生き方を考え、この社会のあり方を問うています。その中で福島県民を先頭に、多くの人が闘いに立ちあがっています。9月11日には新宿で1万人、9月19日には明治公園に6万人が集結して原発反対の声をあげました。このような全国の人々の行動によって、来年春にはすべての原発が停止し、廃炉へと向かう展望が開けています。一方、それに対して野田政権は執拗に原発の再稼働を狙い、大学は御用学者を先頭にフクシマへの棄民政策に加担しています。私たち学生は、この情勢において、現実を見据え、この社会のあり方を真剣に考えるときが来たのではないのでしょうか。

9月19日の6万人集会で、福島から来た武藤類子さんはこう述べています。「真実は隠される。国は国民を守らない。事故はいまだに終わらない。福島県民は核の実験材料にされる。放射能のゴミは残る。なお、原発を推進する勢力がある。私たちは棄てられたのだ。福島県民は今、怒りと悲しみの中から静かに立ち上がっています。私たちは今、静かに怒りを燃やす東北の鬼です。私たちは誰でも変わる勇気を持っています。奪われてきた自信を取り戻しましょう」。人類史上最悪の放射能汚染が福島県を中心としてなおも広がっている今、御用学者たちは「原発の安全神話」に代わって「放射能の安全神話」を創りだしています。福島県の放射線健康リスク管理アドバイザー・山下俊一長崎大教授(福島医大副学長)は「放射線の影響はココニコ笑っている人にはきません」などとすさまじいデマをまきちらしています。さらに彼は「100ミリシーベルトまでなら影響はない」と主張していましたが、低線量被曝による影響がでることは明らかです。山下は「将来ガンになった場合、原発事故に原因があるのではない」と語り、東電と政府の免罪を準備しているのです。

今、原発を必要だと主張し、推進する勢力は、「経済」のために原発を動かさなければならないと言っています。人間が生活するために必要なはずの「経済」活動が福島の人々を見殺しにし、私たちが分断するために使われています。このような現実を私たちは未来に残すべきなのではないのでしょうか。

国立大学法人化以降、大学と企業の癒着は一層進み、学問は金儲けと支配の道具へと変わって行きました。私たち学生の日常生活までがすべて食べ物にされています。「学費一就活一奨学金」の三重苦に縛られてバイト漬けにされ、サークル活動には規制につぐ規制が強いられています。学生の交流が奪われると同時に、学生の居場所が学内からますます奪われ、大学内で学生同士が真剣に自由な討論を行うことすら困難な現実が作りだされています。学生のピラマキ・立て看板が禁止され、学内には学生の活動を監視する専門の職員が闊歩する法政大学がその典型です。フクシマの怒りを抑え込んでいるのも、政治や社会のことについて学生が討論することを抑え込んでいるのもこの同じ大学の変質です。「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」の佐藤幸子さんは「若い人のチカラで原発を止めてください。福島のような子供を2度とつくってはダメです」と訴え、ある福島大生は「みんなが声をあげれば、原発はとめられる」と檄を発しています。私たち学生はこの声に応え、いまこそこの矛盾が最も集中した場所である福島の地から、大学のあり方を問う一歩を踏み出すべきなのではないのでしょうか。

私たちは改めて10・21へのすべての学生の参加をよびかけると共に、この10月を「フクシマ連帯月間」として、全国の大学でフクシマとの連帯を掲げて行動を企画することを呼びかけます。この10月にフクシマとつながる一つの全国的な学生の運動をつくりましょう。